様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １７ 日現在

機関番号：３７１１８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２０９５

研究課題名（和文）乳児院･児童養護施設及び里親養育における乳幼児期からの連続性を持った心理的ケア

研究課題名（英文）Psycological care that preserved continuity from early infancy in home for infants ,children's home and foster parents

研究代表者
大迫　秀樹（HIDEKI, OSAKO）

福岡女学院大学・人間関係学部・教授

研究者番号：５０４１２４７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、社会的養護における小規模化や家庭養育推進の背景を踏まえた上で、乳児院、児童養護施設、および里親における乳幼児期といった早期からの連続的な視点を持った心理的ケアのあり方の解明と、そのための有効な方策の構築を目的として実施したものである。アンケート調査及び実地インタビュー調査により、ライフストーリーワークの考え方などを取り入れて、養育の連続性を重視する取り組みが進展していた。また、施設、里親家庭の双方において、現在の状況のもとでのメリットやデメリットが明らかになった。研究の成果を現場に還元するような実践的な取り組みにつなげていくことなどが重要であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
社会的養護の領域では、施設における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化、及び里親養育への転換などが進展している状況であるが、今回、全国規模の調査と個別の実地調査による時宜を得た研究を進めることにより、その状況と課題を明らかにすることができた。具体的には、ライフストーリーワークの考え方に基づく支援の重要性、施設の小規模化のメリットを考慮しつつデメリットへの対応することの必要性、施設の多機能化や高機能化がもたらす意義、そして里親養育の特色と留意点などが明らかになった。心理学的な観点からも重要な示唆であり、かつ今後の制度の充実にもつなげていくことができるなど、学術的な意義と社会的な意義を示した。

研究成果の概要（英文）：In this study, we tried to reveal the outline of the psychological care with the continuity from the early stage for the infant in the baby’s home ,children’s home and nursing parents construct the effective strategy. Through the Questionnaire and field interview survey, we find the effective way of the psychological care, life story work etc. and the merit and the demerit based on current situation was revealed in the institution and nursing family. We have to construct and practice the effective efforts by returning research results to the site.

研究分野：社会福祉

キーワード：乳児院　児童養護施設　里親　心理的ケア　連続性　乳幼児期

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）被虐待児に対する施設での心理的ケアの重要性

被虐待等により児童福祉施設に入所した子どもに対する心理的ケアの必要性が唱えられて久しい。これまでの研究では、被虐待児に対する施設での心理的ケアにおいては、従来の外来相談型とは異なり、心理職が、保育士等の生活担当職員との協働、コンサルテーションを行うなどしつつ行う生活場面を含めた統合的な心理的ケアが極めて重要であることなどが示され、一定の成果を積み上げてきた（例えば、大迫、2003，2008）。その上で、施設養護における課題としては、①乳幼児期といった早期からの連続性を持ったケアのあり方、②心理面を重視したところでの有効かつ具体的な心理的なケアの方法・心理職の役割や育成等、③里親や保護者への支援を含む施設が持つべき新たな専門的な役割といった３つの点を設定し、「乳児院・児童養護施設における乳幼児に対する早期からの連続性を持った心理的ケア」（科研費基盤(C)：代表者、大迫秀樹、分担者、白澤早苗）のテーマについて研究を進めてきた。その結果、法令、制度改正などによる施策の効果を受けつつ、現場職員による専門的な取り組みが行われ、上記の 3 点の課題についての解明が進み、幾つもの有効かつ具体的な取り組みを明らかにしてきた（大迫、2017, 2018）。

（2）施設の小規模化、里親養育推進等に伴う課題の解明と今後の有効な方策の探求

この上で、新たな解決すべき課題として、次の 3 点が考えられた。まず一つ目として、施設の小規模化、家庭的養護の推進に沿った上での乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアのあり方の探求である。現在、施設形態が大きく変革していく時期にあたり、それを踏まえてどのようなあり方が求められるのかについては、今後の経過に沿って明らかにしていく必要がある。二つ目として、今後のより一層の家庭と同様の環境での養育、すなわち里親養育の推進という方向性（2017 年 8 月「新たな社会的養育ビジョン」等）を受けた上での、さらなる里親支援、里親家庭等との協働、保護者支援、専門性の発揮、地域支援等の新たな施設の役割に関する検討である。このことは、現状と今後の方向性を考えると、急務かつ重要な課題である。さらに、三つ目としては、当面は施設処遇も必要であることから、これ迄の研究から明らかになった、施設にて継続実施している“繋ぎ”を重視した複数の有効な取り組みの実践と評価を中期的に行って、その効果を確認することなどとしたものである。

２．研究の目的

（1）主たる解明すべき点

以上の課題に基づき、以下の３点の解明を大きな目的として調査研究を行う。①施設の小規模化、家庭的養護の方向性のもとでの乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアのあり方、②家庭と同様の環境での養育の推進を踏まえた上での里親支援・協働等を中心とする施設の新たな役割、③施設での実践に関する評価と今後の展開である。なお、施設職員への調査だけでなく、施設との関係性を持つ里親の協力も得て行うこととする。

（2）本研究の特色と意義

児童養護施設等において心理職が配置されてからの経過は比較的短く、この領域における課題（特に心理面）への関心が十分高まっているとは言い難く、また、学術的研究を行うことができる心理職や現場に詳しい研究者の数は十分ではない。非常に研究が少ないため、その意義は大きい。また、施設及び里親等の関係性を心理的視点から双方向に結びつけたこと、今後の社会的養育の方向性に沿っていること、施設ＳＶ担当非常勤職員として実践フィールドがあることなどから、現場実践と研究経過・成果を双方向に繋いでいくことが可能である。また、全国規模で行う調査研究により、俯瞰的、総合的な立場からの知見を得ることができる。これらを主な目的として実施するものである。

３．研究の方法

（1）研究Ⅰ（アンケート調査）

乳児院・児童養護施設における乳幼児期からの連続性を持った心理的ケア、里親支援、里親家庭との協働等に関するアンケート調査研究を実施する。本研究では、前回の研究時点とは状況が異なり、より一層小規模化・家庭的養護の推進が進んだ状況を踏まえた上での全国の乳児院・児童養護施設における乳幼児期からの連続性を持った心理的ケアのあり方の変化や課題等、及び里親支援、家族支援、あるいは協働等の状況や課題等に焦点をあてて、アンケート調査研究を行う。回答者は、施設長、心理職、里親支援専門相談員、家庭支援専門相談員等を対象とする。また、翌年度以降の協力可能性と合わせ、有効かつ特徴的な取り組みを行っている施設を抽出していくこととする。

（2）研究Ⅱ（実地インタビュー調査）

乳児院・児童養護施設における乳幼児期からの連続性を持った心理的ケア、里親支援、里親家庭との協働等に関する実地インタビュー調査研究を実施する。研究Ⅰを受けて、有効な取り組みを行っている施設を選定し、具体的な取り組み状況やその効果、課題等について聞き取り調査を行う。対象者は、施設長、心理職、里親支援専門相談員、家庭支援専門相談員などとする。また、里親への聞き取り調査も行ない、里親家庭養育の状況や、必要とされる施設からの支援、協働の

方法等についても聞き取っていくこととする。

４．研究成果

今回の研究の実施においては、感染症の影響を大きく受けた。特にアンケート調査に続いて、実際に現地を訪問して行う実地インタビュー調査の実施時期が、感染症拡大の時期とまさに重なったため、調査ができない期間が想定以上に長期間に渡った。そのため、研究の進行が当初よりかなり遅れ、助成期間の延長などの措置をとった。そのような状況下、研究期間の終盤には感染症もかなり収束し、最終的には、多くの実地調査等に基づく貴重なデータの収集ができて、成果を上げることができた。

実施された一連の研究から収集したデータに基づくと、全国の施設においては、地域の特色や施設の文化などの影響が大きく、個別的状況による大きな差異が認められることが分かり、一概にまとめて論じることが難しい部分はあることがわかった。しかしながら、重要かつ共通する部分を、包括的な視点からまとめると以下のようになった。なお、成果については、引き続き分析途中のものもある。

(1)子どもの育ちをつなぐ―ライフストーリーワークの実践の重視

子どもの育ちをつなぐ（養育の連続性、生い立ちを知る権利の保障）という点で、施設によって始めた時期は異なるが、多くの施設においてライフストーリーワークの考え方に基づくような取り組み、すなわち連続性を持った心理的ケアの取り組みが、全体的には一層重視されるようになってきていることが明らかとなった。その考え方に基づき、具体的には、養育の環境（同じ場所）を変えず、養育者が変わらない縦割り保育を重視するなど、環境と養育者の安定性・連続性に配慮するような取り組み、「つなぐアルバム」、「育ちアルバム」を作成し、成長の過程を伝えることができるような取組み、「telling 絵本」を作成して、未来につないでいくための語りという形で整理しているような取り組みを行っていることなどが示された。また、措置変更の場合には、事前・事後の慣らし保育を行う取り組み、措置変更後にも事後訪問、「里帰り行事」等の取り組みを行うなど、乳児院、児童養護施設、そして里親家庭の間での相互理解が進んでいた。なお、コロナ感染症の影響を受けて、オンラインを活用して慣らし保育を実施（一部）したという施設などもあった。このような育ちをつなぐという取り組みは、子どもにとって自分の人生を振り返りつつ、整理することで、その歩みを前に進めていくための力につながると考えられた。

(2) 小規模化によるメリットとデメリットへの対応

施設の小規模化の導入が、以前に比してかなり進んでおり、特に、実地調査の対象施設では小規模化が導入されていた。小規模の養育環境を構築するメリットとして、家庭的な形態での養育により、しっかりとした居場所としての機能が構築されることが愛着形成、安全感・安心感の確保にとって大きな意義を持つこと、里親家庭への移行がスムーズになったり、将来的に家庭を持つ準備ができたりすること（大舎でずっと育つと「家庭」がわからないということが起こりうる）、自分の気持ちを整理して言葉にすることを援助してくれる大人が近くにいることの意義が大きいこと等小規模化はおおむね子どもにとってプラスだということが明らかになった。一方で、デメリットとしては、狭い人間関係の中で不調が起こった場合にむしろ課題が大きくなること、職員にとっての負担は増し、ある程度、中核となる職員が配置できない場合などには、むしろ子どもを取り巻く環境が不安定となる。特に、地域分散化をした場合などには、その影響がより大きくなり、本体施設との連携やバックアップが取れないと大きな課題が生じやすいということがわかった。また、小規模施設ごとに独立した運営になってしまうことがあるので、施設（ホーム）間の連携を保つことができないと、やはり環境が安定しない。つまり、子どもを取り巻く人的な環境も、物理的な環境とともに非常に重要であり、その点への配慮も必要だということが示された。

小規模化に伴う養育における連続性を保つための工夫としては、ある程度経験の長い、中核となる職員を配置することで、養育の連続性を保つようにすることが重要だが、そのためには、職員が継続して勤務していることが必要であり、職員育成の重要性とも深く関連することが示された。その上で、ホーム間の連携をとるために、合同での会議を開催する、ホーム間を見渡すことのできる職員をＳＶとして配置して、ホームが孤立しないようするなどの取り組みが重要であった。なお、乳児院の場合には、昼間は小規模だが、夜間は大舎として、職員間の協力体制に十分に留意するという取り組みなども有効であった。今後の形態としては小規模施設が一般的になっていくと考えられるが、研究から明らかになった点、特に職員配置、育成の課題等を踏まえつつ、進めていくことが重要だと考えられた。

(3) 施設の多機能化・高機能化への対応

取り組みは施設ごとに様々であるが、一時保護施設を専用で設置し、心理職も専属で配置するなどして、アセスメント機能を充実させること、家族支援棟を設置し、心理職が、保護者等への養育訓練プログラムを実施することなどにより、多機能化・高機能化に取り組んでいる実態が示された。また、里親支援専門相談員を配置したり、里親フォスタリング事業を県や市などから受託し「フォスタリングセンター（機関）」を開設して、里親のリクルート、マッチング、研修・トレーニング事業、相談支援といった事業を積極的に展開している施設も増えてきており、里親支援や地域支援が進んでおり、その際には、経験豊富な心理職、児童指導員などが大きな役目を担っている施設が少なくなかった。施設養育のノウハウを里親支援や地域に還元していく取り組みとして、施設が持つ機能の重要性も認められた。引き続き施設の持つ役割や機能を高めてい

くことも非常に重要だと考えられた。

（4）里親養育の特徴と課題

里親に対する調査からは、それぞれの里親の環境は多様であるが、全体として見ると、「縦と横のつながり」が重要であることが示された。縦のつながりとは、人生の長きにわたって（里親家庭を離れた後も含めて）つながり続ける場所と人がいることであり、子どもにとっては、それによって形成される安心感の重みが明らかとなった。また、横のつながりとは、ファミリーホームの場合にはスタッフ同士のつながり、地域の里親であれば、里親同士のつながり、つまり、レスパイトなども含めて里親同士でお互いに支えあい、チームワークを保ちつつ育てていくことが大事であり、里親サロンの活動などは極めて重要だということがわかった。また、児童相談所の職員、施設の里親支援専門相談員からの支援も非常に重要であった。今後、里親養育に重点が移行するにしても、やはり、里親を支援する人や機関が必要であり、協働して養育にあたることが重要であることが明らかとなった。

（5）今後に向けて

今回の研究により、時宜を得たところでの重要な知見を得ることができたと考えている。それら知見を社会に還元していくために、本研究成果を学術的な観点から学会等にて発信していくことはもちろんのこと、現場の実践におけるＳＶ活動等によって職員や里親の育成やフォローを行っていくこと、あるいは社会的養護の制度設計等に対する心理学的な視点からの行政機関等に対する提言などに結び付けていくことなどが必要だと考える。引き続き、成果を適切に、しっかりと還元していくことが重要であると考えた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 大迫秀樹・白澤早苗	４．巻 21
２．論文標題 児童養護施設における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケア	５．発行年 2024年
３．雑誌名 福岡女学院大学大学院紀要　臨床心理学	６．最初と最後の頁 1‐9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大迫秀樹・白澤早苗	４．巻 20
２．論文標題 乳児院における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケア	５．発行年 2023年
３．雑誌名 福岡女学院大学大学院紀要　臨床心理学	６．最初と最後の頁 37－44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大迫秀樹・白澤早苗	４．巻 23
２．論文標題 児童養護施設における早期からの連続性を持った心理的ケアにおける実地インタビュー調査研究	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福岡女学院大学紀要　人間関係学部編	６．最初と最後の頁 23－30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大迫秀樹	４．巻 19
２．論文標題 こころのつながりを確かなものにする福祉心理学－福祉心理学の今、そしてこれからを展望する	５．発行年 2022年
３．雑誌名 福祉心理学研究	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大迫秀樹・白澤早苗	4．巻 22
2．論文標題 乳児院における早期からの連続性を持った心理的ケアに関する実地インタビュー調査研究	5．発行年 2021年
3．雑誌名 福岡女学院大学紀要　人間関係学部	6．最初と最後の頁 71-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大迫秀樹・白澤早苗	4．巻 21
2．論文標題 乳児院・児童養護施設での乳幼児合同ユニット運営における乳幼児への連続性を持った心理的ケア	5．発行年 2020年
3．雑誌名 福岡女学院大学紀要・人間関係学部編	6．最初と最後の頁 65－72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 大迫秀樹	4．巻 第16巻1号
2．論文標題 社会的養護をめぐる状況と社会的養育の推進に向けた動き	5．発行年 2019年
3．雑誌名 福祉心理学研究	6．最初と最後の頁 1－6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 大迫秀樹・白澤早苗
2．発表標題 乳児院における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケアに関する実地調査研究
3．学会等名 日本福祉心理学会第21回大会
4．発表年 2023年

１．発表者名 大迫秀樹・白澤早苗
２．発表標題 児童養護施設における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケア
３．学会等名 日本福祉心理学会第20回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 大迫秀樹
２．発表標題 こころのつながりを確かなものにする福祉心理学：福祉心理学の今、そしてこれからを展望する
３．学会等名 日本福祉心理学会第19回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 大迫秀樹・白澤早苗
２．発表標題 乳児院における小規模化・地域分散化、高機能化・多機能化に伴う早期からの連続性を持った心理的ケアに関する研究
３．学会等名 日本福祉心理学会第19回大会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 日本福祉心理学会、米川　和雄、大迫　秀樹、富樫　ひとみ	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 304
３．書名 福祉心理学〈日本福祉心理学会研修テキスト〉	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	白澤　早苗 (SANAE SHIRASAWA) (50389243)	福岡女学院大学・人間関係学部・教授 (37118)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関